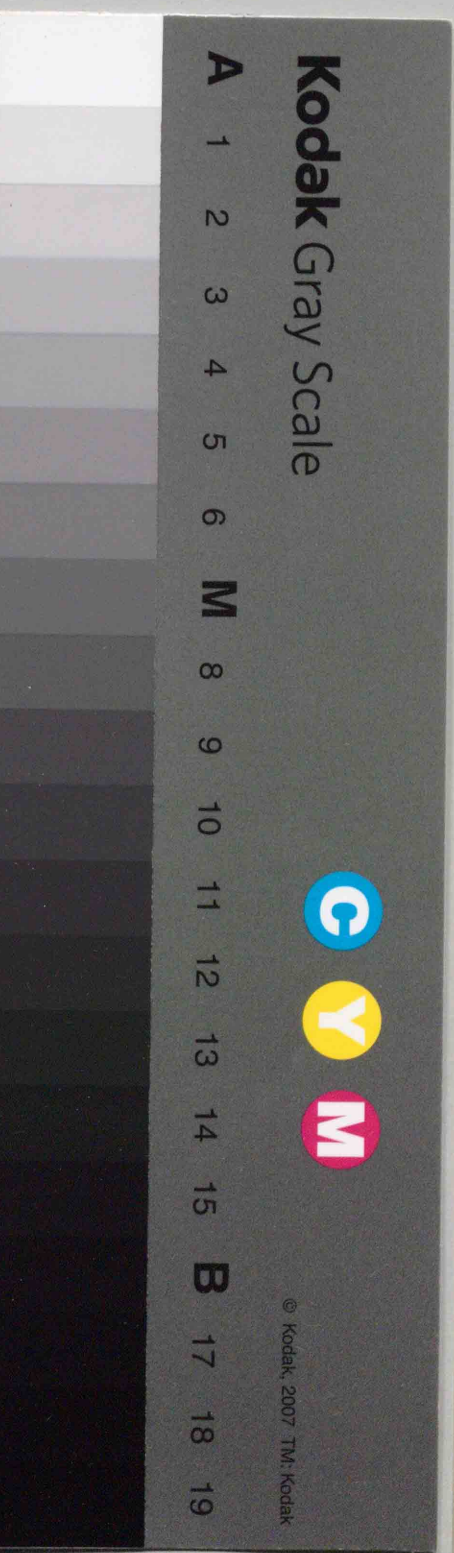
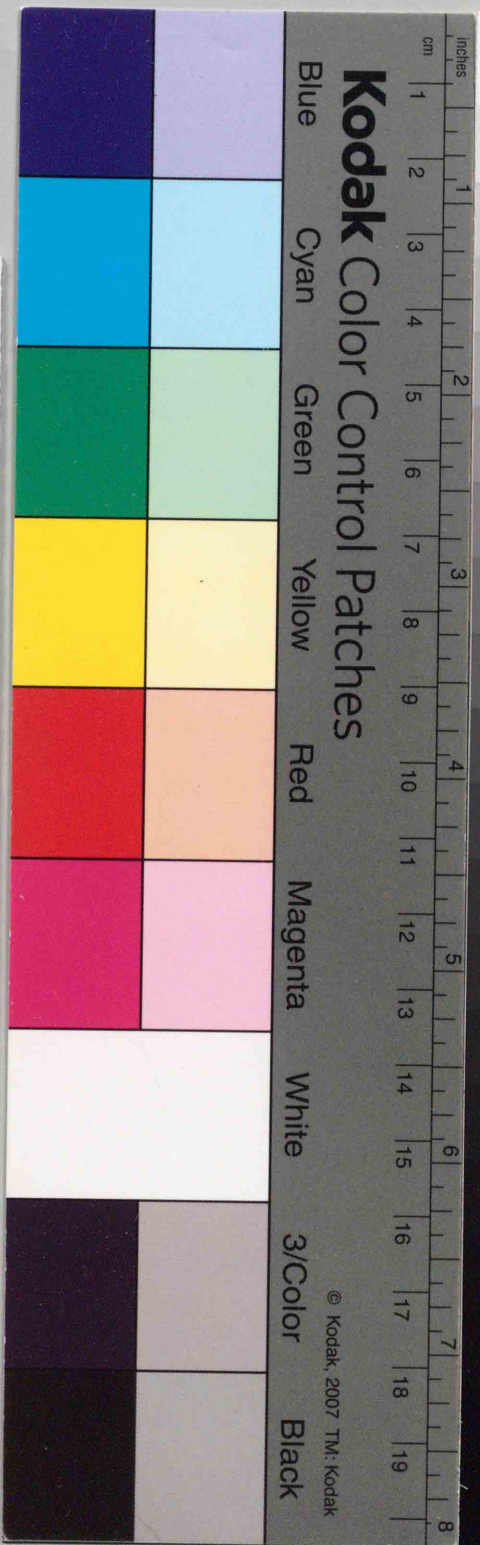


訂補
新體國語教本

藤岡作太郎編纂
藤井乙男補訂

九

375.9
Fu10
資料室



42072

教科書文庫

4
810
41-1912
20000 34505

71.0



375.1
H10

文部省檢定
大正十年十月九日
中學國語教科用

補訂
新體國語教本

文學博士藤岡作太郎編纂
文學博士藤井乙男補訂

東京 開成館藏版



卷九目次

一	明治天皇……………	一
二	明治の一瞥 (一)維新の前と後……………	八
三	櫻の賦……………	一六
四	春色秋光……………	一九
五	萬里長城懷古……………	二三
六	奈良の舊都……………	二四
七	萬葉時代の歌人……………	二九
八	鎌倉……………	三四
九	鎌倉時代の文學……………	三六

目次

一〇	西行法師	四
一一	奥の旅路	四
一二	孔子の好學	五
一三	釋迦の奮闘	五
一四	天才	六
一五	義時教訓	六
一六	新島守	六
一七	漁夫	七
一八	落花の雪	七
一九	夏の歌	八
二〇	京都の山水と平安朝	八
	その一	二
	その二	六

二一	京都の山水と平安朝	六
	その二	六
二二	歌文の才	九
二三	國歌評釋	九
二四	明治の一瞥 (二) 經過一斑	七
二五	上島鬼貫	五
二六	俳句	九
二七	百蟲譜	〇
二八	秋の月	四
二九	述懷	八

補訂新體國語教本 卷九

一 明治天皇

天つ日嗣

禁裏

逆鱗

伏して惟んみるに、歴代の聖帝天つ日嗣と大八洲知ろしめ
せば、動きなき國の光も長へに、いや明かに輝くべし。されど
仰ぐ御空も晴くもりあり、源頼朝幕府を開くに及びて、強ひ
て政治兵馬の權を預り奉りき。後鳥羽上皇皇權の恢復を圖
りたまひしかど、御企成らず、禁裏を出でて、空しく遠島に神
さりましし御軫念の程を推し測り奉るにも、いとゞ涙は止
らず。後醍醐天皇も北條氏の專横に逆鱗ましく、て、大事を

車駕 遷幸 還幸 宸襟 行宮 崩御 供御 叡慮 行幸 御幸 駐輦 鹵簿

思ひ立たせたまひしが、御謀敗れて車駕また隱岐に遷幸あり。聖運更に開かせたまひて、めでたく京師に還幸なりしかど、中興の偉業久しからずして廢れ、宸襟を惱ましたまひつ、南山の行宮に崩御ましくき。戦國の世、皇室の式微は申すも畏し、朝儀の廢絶したるはさらなり、日常の供御も叡慮のまゝならず。信長、秀吉が戦亂を平げ、勤王の志を表ししに至りて、天日漸く雲を破りぬ。秀吉が聚樂第の新築成るや、奏請を容れたまひて、天皇こゝに行幸あり、上皇も共に御幸ありて、駐輦五日に及ぶ。父老その鹵簿を拜し、涕を流して曰く、想はざりき、今日太平の世に遭ひて、この盛儀を見んとはと。されど未だ御親政の世に復れる

(卷九)

玉體 九重 御製 龍顏 陛下 御降誕 儲位

にはあらず。徳川幕府固く實權を收め、朝廷を牽制し奉りて、烏兎匆々また三百年、孝明天皇はわけて英邁の君にましまし、國步艱難の時に大統を承けて、夙夜朝權の伸張を計り、玉體を擲ちて、國難に代らんと祈りたまひき。

戈とりて守れ、宮人、九重の

御階の櫻風そよぐなま。

といふ御製を誦し奉れば、龍顏の御曇眼のあたり拜み奉るが如し。

いはまくもあやに畏き明治天皇陛下は、その皇子にましまし、嘉永五年九月二十二日御降誕あり、後に太陽曆に改算して、十一月三日を天長節と定められぬ。萬延元年儲位に立ち、

踐祚 登極 南殿 親裁 賢所 天恩 寶祚 巡幸 鸞輿

慶應三年御踐祚、その翌年即位の大禮を行ひ、一世一元の制を立てて、年號を明治と改めたまひぬ。登極の初、幕府大政を奉還せしかば、天皇南殿に出御し、公卿諸侯を召し、天地神明を祭りて、五事の御誓約を爲したまへり。維新の大基こゝに立ち、幕政七百年に近くて、萬機親裁の世に復りしぞめでたき。又明治二十二年の紀元節を卜し、天皇親しく賢所を祭りて、帝國憲法を發布したまひぬ。偏にこれ國家の隆昌と臣民の幸福とを計りたまひし所以にして、上下舉つて天恩の優渥に感泣し、寶祚の萬歲を祝し奉りき。

明治五年伊勢神宮に參拜したまひ、畿内、山陽、西海の諸道を御巡幸あり。その後鸞輿は東北、北陸、北海道に至りて、廣く

至尊

天覽

天機

殿下

竹の園生

海内の民情を御視察あらせられき。かくの如きは建國以來未曾有の事ぞかし。至尊が常に大御心を國民の休戚に注ぎたまひしことは申すも恐多く、御前に堆き文書類は細かに天覽あり、大臣等が奏上する政事は、假初のことといへども熟慮したまひ、疑はしきは幾度も御下問ありて後御裁可あらせられき。宵衣旰食、嚴寒酷暑も厭はず、政務に勵精したまひしに、天機いつもうるはしく、よくぞ御違例もなきことかなと畏み奉るばかりなりき。

天皇は大元帥として陸海軍を統率したまひ、皇太子殿下を始め、竹の園生の方々も軍務に就かせらる。年々の大演習には、親しく龍馬を驅りて山野を跋涉し、時には風雨の中に幾

駐蹕
大轟
行在所

勅許
勅諭
勅語
臨幸
便殿
勅旨
乙夜の覽

御歌

龍馭登遐
寶算

時間も御駐蹕あり。二十七八年戦役の際は、大轟を進めて大本營を廣島に置きたまひ、師團司令部の一部を行在所に宛て、不便なる一室にて萬機の御裁決あり。御左右の人々御座所の増築を奏請し奉れども、戦地の將卒を思ひやれば、かばかりの不自由は何かあらんとて、勅許なかりきと申す。

軍人の規箴は明治十五年の勅諭にして、臣民が日夜服膺すべきは二十三年の教育勅語なり。文武は偏重すべからずとて、明治三十七八年戦役の際、東京帝國大學の卒業式に臨幸あり、時の文部大臣を便殿に召して、軍國多事の時と雖も教育の事は一日も忽せにすべからざる由の勅旨を賜ひぬ。さればまた文學の御嗜も深くまし、古今の典籍多く乙夜の覽に入る。毎年の初、武事には陸軍始の觀兵式を行はせらるゝが如く、文事には御講書始あり、當代の碩學を選びて和漢洋の書を講ぜしめたまひ、又毎春の歌御會始には、御製及び皇后陛下以下の御歌を下したまひ、普く臣民の詠をも上らしめたまひき。尤文允武の御資性畏しとも畏しや。御製に、

つかさ人まかでし後の夕まぐれ、
心しづかにふみを見るかな。

昭代聖徳の化に鼓腹せる吾等臣民、心を一にして聖壽の無疆を祈り奉り、永く堯天舜日の下に浴せんことを冀ひしに、悲しいかな、明治四十五年七月三十日龍馭登遐奄ち人天を隔てたまふ、寶算六十一。億兆慟哭、さながら考妣を失へるが

如し。

畏くも皇嗣におはしましし今上天皇陛下大孝至仁、罔極の憾を抱き、哀痛やらんかたなくおはすれど、國家一日も君なかるべからざるを以て、即ち神器を紹承し、萬世一系の帝祚を踐み、年號を大正と改めたまへり。先帝の深恩厚澤に浴して仰報に由なき吾等臣民は當に忠盡を今上天皇陛下に竭し、恩澤の萬一に報い奉らんことを期すべきり。

二 明治の一瞥 (一) 維新の前と後

わが國の社會に起れる變革の最も急劇なるもの、前には大化改新あり、後には明治維新あり。趨勢相似たりといへども

千里の江流一日にして下る
(引喩法)
李白の詩の句に
千里江陵一日還とあり

大化の簡素は明治の複雑に比すべくもあらず。維新以來百般の事態は盡く面目を新にせり、舊日本は仆れて、新日本は立てり。千里の江流一日にして下り、僅々三四十年間に驚天動地の改革を成し得たるふと、古今に比なく、東西に例なく、千歳稀覯の偉觀なり。

階級制度

猗頓の富
(引喩法)
猗頓は支那の古代の富豪

五十年前と今日と彼此の社會を比較せば、誰か世態の激變に驚かさらん。維新以前は階級制度の世なりき。士農工商の別は儼然として立ち、公卿大名は町人百姓を土下坐せしめ、武士は斬捨御免の特權を有す。猗頓の富ありとも、庶民は綾綸子を着、乗物を用ふるを得ず。坐作進退その分に隨うて一格式あり。かくの如き階級の制は執務の等類に基づきて

陛下

公武

新に朝廷に立ちて政務に與れるもの、公卿あり、大名あり、陪臣あり、彼此座を列ねて、公武主従の別なく、齊しくこれ陛下の臣のみ。家格を問はず、材幹によりて官吏を任用すれば、ここに階級の制は挫折せり。加ふるに教育の普及も舊制打破の一大勢力なり。全國に互りて學校の設備あり、いかなる僻地にも啣喁の聲を聞かざる事なければ、人智の進歩と共に、窮民貧兒も亦自覺の念を生じて、王侯將相もと種あらずと信ずるに至りぬ。税法の改正に於ても亦然り。維新以前には、士人は文武の道を講じて、社會の儀表たりといふを以て、毫も租税を納めず、勞作辛苦の庶民のみこれを課せられ、その寛嚴また時處によりて等差多かりき。この舊習を改めて、齊

啣喁の聲

王侯將相もと種あらず

(引喩法)
奉の陳涉の語に
王侯將相寧有種
乎とあり
社會の儀表

平等の觀念

今しも

いふにしも

統一

しく上下に納税の義務を負はしめたるは、いかばかり國民に平等の觀念を與へたるぞ。徴兵の制を定め、全國の壯丁を選んて、兵役に服せしめたることも、特別なる階級の廢滅を助けたり。武士の跋扈は消えて跡なく、帶劍執銃擧つて王事に盡瘁するは、今しも一般の國民が義務にして又權利にあらずや。交通機關の發達がまた都鄙の懸隔、地方の差別を銷磨し去りたるは、いふにしも及ばず。かくしてわが國民は全體として統一あり、個人として平等なり、華士族平民の名稱は存すれども、實際の等差は著しからず。積極進取欲するところに才を伸すを得るに至れり。

階級の制既に壞れて平民固より官に就くべく、華士族も農

徒爾

工商の業を營むこと隨意なれば、從來は家業を墨守して徒爾の生涯を送りしもの、各自その希望に嚮つて進み、伎倆に随つて貧富一ならず。無經驗の所に手を着けて、高祿の士の忽ち路頭に彷徨するに至れるも少からざりしが、有爲にして機を見るに敏なる士が、官府より轉じて實業界に入り、一躍して鉅萬の財を積めるもあり、明治第一の暴富は岩崎彌太郎にして、汽船運輸の業を創め、經營十年早くも累代の老賈三井住友を凌げり。澁澤榮一また第一銀行を立て、財界の元老と稱せらる。されば初は高等教育を受けたるもの、猶多くは官吏たるを喜びしが、今や却つて實業に就かんことを欲す。官尊民卑の積弊の失せたるは喜ぶべしといへども、業

元老

天分

務の選擇に利益の計算を先として、別に人間の天分あることを忘るゝ弊往々にして、是れあるは、力めて矯正せざるべからず。

文藝

階級の破壊は進んで文藝の上に及べり。維新以前の風習を見よ。武士が楽しむところの畫は土佐、狩野にして、町人は浮世繪を弄び、彼は能を好み、此は劇を喜び、一方に漢詩和歌あり、一方に狂歌俳諧あり。士分は修身齊家の道を學ぶに急にして、戲曲小説の如き卑しんで顧みず。輕文學の作家もまた自ら低うして戲作者といひ、その作を以て童蒙の玩に供すと稱したりき。今日も修養ある少數と凡俗なる多數とは好尚おのづから異なれども、前代の如き階級の差は既に見る

輕文學

好尚

見解
向上

べからず。文藝に對しては新舊全く見解を異にし、その實質も向上し、世人は文明の精華として、これを尊重するに至れり。

三 櫻の賦

神の御代より咲きそめて、神のかた免しもとつ國、あきつ島根にたくひなた、ひかりをそふる櫻ばな。

神の御名をも宮の名も かざりし乃こか、み吉野の一木の種はうつされて、御階にちかくうゑられぬ。

木花咲耶姫
磐余稚櫻宮、履
仲天皇の皇居

水上落花

旅宿花

芳野川岩せの波
がよる花や青根
雲に消ゆる白
源頼政
櫻散る木の下風
は寒からで空に
りけるぬ雪ぞ降
りける 紀貫之
行き暮れて木の
下蔭を宿とせば
花や今宵の主な
らまし 平忠度
櫻待雨は降り來
ぬ同じくば濡る
れん 花の蔭に隠
れん (拾遺集)
吉野山花も時得
てさきにけり都
のつとに今やか
ざさん
後村上天皇
こゝにても雲の
櫻さきにけり
たかりそめの
宿と思ふに
後村上天皇
後醍醐、後村上、
後龜山の三代

これだになくば、世の人の 春のこゝろはのどけしと、
いふまで待ちて待ちえたる その眞盛のうるはしや。

青根がみねにたつ雲は けふも絶えまもなりけり、
戸無瀬におつる白雪に 袖さむからぬみやこびと。

ひねもすきほふ櫻がり、 そこともしらずゆきくれて、
雨もふりきぬ、同じくば ぬるとも蔭にやどらまし。

かへる都のつとにとて、 折りはしほれど、九重の
雲ゐの花のかげにして、 帝の三代もすぎにけり。

み吉野の高嶺の
櫻ちりにけり嵐
も白き春の曙
後鳥羽天皇

鳥羽法皇
散るもうし散り
しく庭もはかま
うし花に物思ふ
春の殿守
(今物語)

吹く風をなこそ
の關と思へども
櫻かな 源義家

願はくは花の下
にて春しなんそ
のきさらぎの望
月の頃
西行法師

契りおく花と雙
の岡のへにあは
れ幾夜の春を過
さむ 兼好法師

頼山陽の今様の
句

本居宣長の歌の
句

古今集以後
(提喻法)

成記 後所大納言

神に祈りて、しばらくは

吉野をうつす山の名の

さかりは留めえたれども、
あらしも白くはやなりぬ。

庭に關路にみだれても、

朝ぎよめする殿守も、

いくさに急ぐものゝふも、

同じく物は思ふめり。

ぎのきさらぎの下かげに、死にて胡蝶とならずやも、

植ゑてならびの岡の邊に、わが世の春はつくさまし。

もろこし人もこま人も やまと心になりぬてふ

朝日ににほふ一枝を、

思ふ人どちかざしつゝ。

四 春色秋光

春色を喜び、秋光を悲しむ感情は、太古より一般に有し來りしものに非ざして、後世に至りて次第く發達せるなり。支那にては唐朝以後に盛んに、我が邦にては古今集以後に盛んなるが如し。個人の發達に就いていふとも、十五乃至二十歳後にあらずばこの感を起すことなく、甚だしきは終生之を知らざる者あり。試に唐以前の詩、古今以前の歌を見よ。春光の熙々たるを喜ぶ者は多かれど、秋色の凋落を悲しむ者は少し。秋色の凋落を悲しまざるのみならず、秋光を喜ぶ

こと春色に等しきもの亦少からず。唐以後、古今以後は、春色を愛するも、ろの熙々雍々の處を愛するに非ずして、穠艶華麗の處を愛するなり。秋光を悲しむも、一陰漸く現れて、穠艶褪せ、華麗休むを悲しむに非ずして、金氣肅殺、木摧け、草消ゆる極處を悲しむなり。終には春を以て喜極つて躍る時となり。秋を以て悲極つて泣く時となすに至りぬ。古今集の歌を以て例となさんに、

在原業平の詠
のどけからまし
(のどけかるまし)

反言

大江千里の詠

世に中に絶えて櫻のなるをせば、
春は去、ろはのどろあらまし。
といへるは春の歌にて、愉快の極を反言したるもの、
月見きむ千々にものこそかあしなれ、

直敍

志賀皇子の御歌

なりけるかも

穂積皇子の御歌

もみちにけらし

わが身ひとつの秋にそあられねど。

といへるは秋の歌にて、悲哀の感を直敍したるものなり。これを萬葉集中の春を喜び秋を悲しむ歌に比すれば、甚だその差あるを見ん。萬葉集の歌に、

石激垂見上乃左和良妣乃

毛要出春爾成來鴨

今朝之旦開雁之鳴聞都春日山

黄葉家良思吾精痛之

春光は和氣洋洋、秋色は西風寂寞、決して古今集の一は雀躍し、一は悲泣するが如く甚だしからざるなり。
花を見ては笑ひ、雁を聞きては泣き、若草を見ては喜び、落葉

抽象

を聞きては悲しむ、これ春色秋光を聞見して生ずる連感のみ。更に春色の中より紅花黄蝶を取り去り、秋光の中より雁聲蟲語を減じ去り、此の如くして抽象し來りたる春と秋とを以て、人間萬事の上に應用したるは、支那に最も多しとす。周の時に春官、秋官の制あるは、その一例なり。春官は邦禮を掌る、祭祀、儀式、卜筮、音樂、教育等はその範圍に屬す。秋官は邦刑を掌る、刑法、警察の事皆その管する所とす。是即ち春には生育の意あり、秋には肅殺の意あるに象れるなり。

(正岡子規)

五 萬里長城懷古

生々る歴史か、積り來し齡は高し、二千年。

(第九)

征驂

影は萬里の空よ入る、名も長城の壁の上、
落日低く、雲淡く、關山みすくくきんとは、
征驂^{セイサン}帳み留りて、俯仰遊子の影一つ。

移らふ

絶域花は稀なぶら、平蕪の緑今深し、
春乾坤^{ウツクワン}よ回りては、空ことくく霞と行く。
天地の色は老いずして、人間の世は移らふ浅、
歌ふる、高く大空に、姿は見えぬ夕雲雀。

霸圖

ふりぬ

嗚呼跡ふりぬ、人去りぬ、歳は流きぬ、千載の
昔よ返り、何の地も今秦皇の霸圖を見む。

たいなか

殘壘破壁聲もあし恨も暗し、夕まぐき、
春朦朧のゝゝなゝに、俯仰遊子の影一つ。

(土井晩翠)

六 奈良の舊都

青丹よし奈良の
都は咲く花のに
ほふが如く今盛
なり (萬葉集)

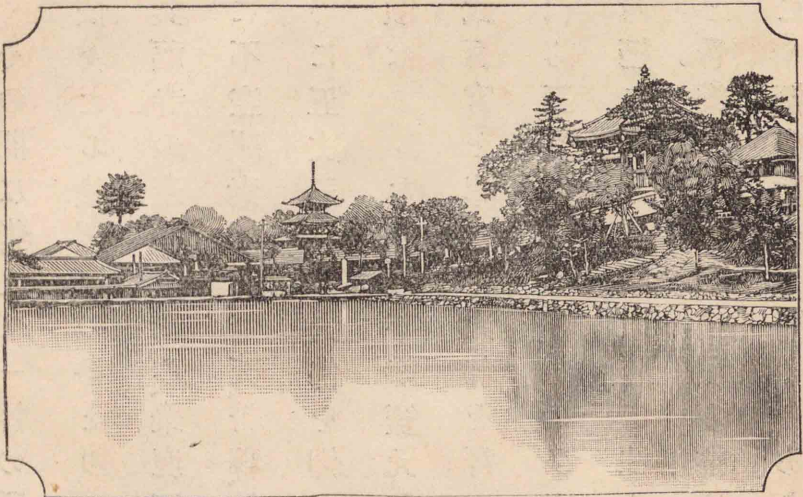
偲(忍)

咲く花のにふが如く盛なりし奈良の舊都を弔へば、風蝕
雨打、こゝに千又二百年を過ぎたれども、七堂伽藍の偉觀今
に都の面影を残して、そゞろにありし世を偲ばしむ。春の日
うらくとして、志貴葛城の峰々に霞たなびける時、まづ法
隆寺を訪へ。日東帝國第一の古名刹は、寂々として菜畝麥隴
の間に眠るが如し。五層の高塔は相輪高く張りて、七寶瑠璃
の莊嚴を現じ、金堂中門の殿閣は畫棟雲を飛して、推古式の

推古式

昔は鳥

髣髴として



猿澤池畔

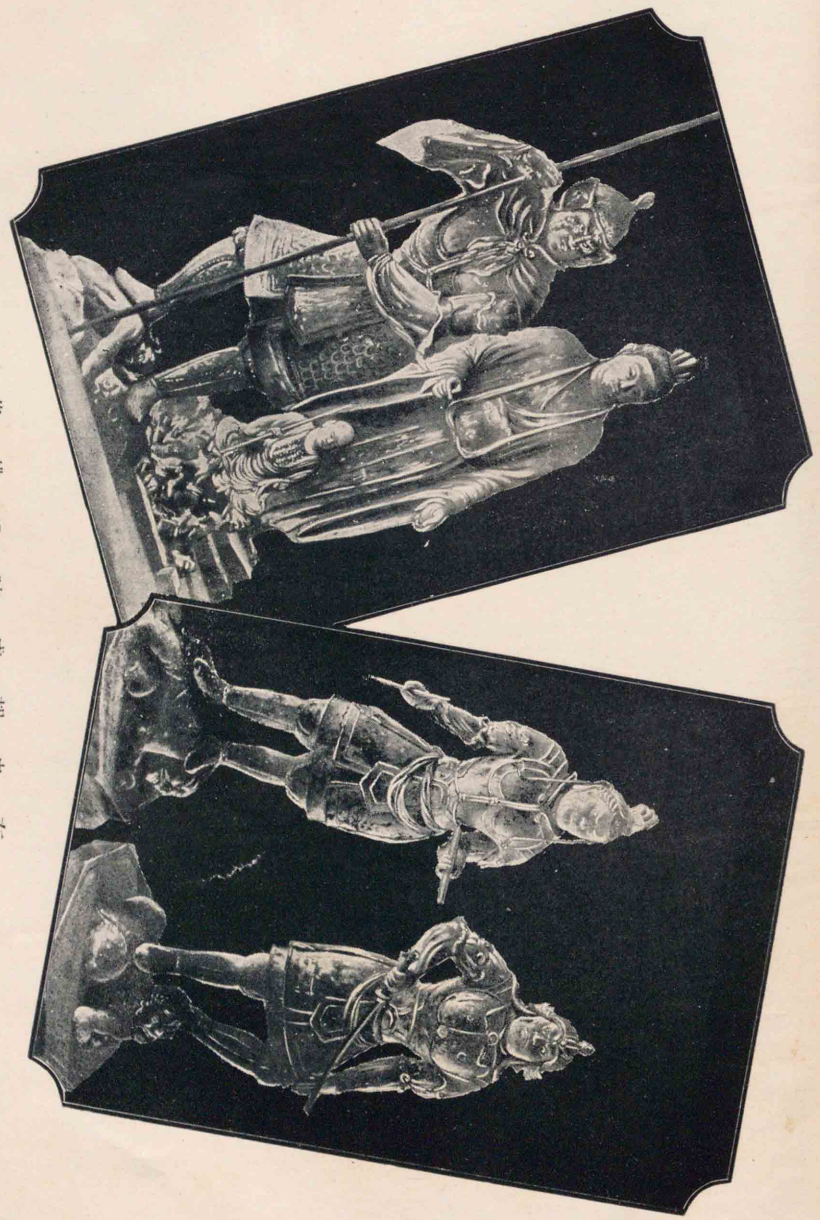
遺韻を傳ふ。燭を秉つて壁畫
に對すれば、諸佛踞々動かん
とし、髣髴として名匠の神に
接する思あり。藥師三尊、止利
佛師の釋迦三尊、夢殿の觀世
音、四天王の像、玉蟲廚子、橘夫
人念持佛廚子、いづれか稀世
の珍品にあらざる。
去りて舊都に向へば、春日の
森は緑滴らんとし、若草山に
は春色満てり。大佛殿の臺高

罩む
依々
濯々

天平勝寶元年は
一四〇九年

三寶の奴

くその間に聳えて、一抹の霞薬師寺の古塔を罩めたり。翠柳
 依々たる猿澤池のほとりにさまよひて、藤家の氏寺たりし
 興福寺の衰殘を憐み、麋鹿濯々たる神苑をたどりて、三月堂
 に不空絹索觀音、梵天、帝釋、執金剛神等の名作を觀、更に東大
 寺に五丈三尺の大佛を仰ぎ見れば、聖武天皇の豪華の程も
 懷はるゝなり。天平勝寶元年のその昔、みかど、皇后、皇太子、文
 武百官を率ゐて大佛を拜し、陸奥に黄金の産せるを祝して、
 自ら三寶の奴と稱し給ひし盛儀いかりなりけん。慈雲
 西極に靡き、法雨東陲に注ぐ、盧舍那佛の尊像を繞りて、花降
 り、音樂聞え、讀誦梵唄の聲はた雲外に搖曳たりし有様は、實
 にや極樂淨土も斯くやありけん。正倉院の勅封倉は今に奈



像佛の時盛朝良奈

（九）二六（ナ）

鍾、篋
藝術

一瀉千里

古事記

日本書紀

風土記

懷風藻

萬葉集

歸依

良文化の粹を鍾め、戒壇院の四天王は天平時代の藝術の精を凝せり。

按ずるに、推古天皇の朝、支那との交通公に開けてより、彼邦の文化は、一瀉千里、潮の如くに傳來し、我邦の文化はこゝに一大變に際會せり。當時、國運漸く隆盛となり、皇威も擴張せられ、國庫も富裕となりければ、奈良の帝都は經營せられ、七世七十餘年こゝに都して前代に靚るべからざる燦然たる文化を現出せり。古事記、書紀の編纂もあり、風土記の撰進もあり。懷風藻と云へる詩集も成り、碩儒吉備眞備、安倍仲麿も出で、萬葉集と云へる歌集も撰ぜられ、歌人柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、同家持等輩出せり。帝室の歸依と人民

斐然として章をなしぬ

(引喩法) 論語に斐然成章とあり

毘陀羅

の信仰とに依りて、佛教は非常の隆昌を致し、隨うて美術は斐然として章をなしぬ。大伽藍、大寺院の建築相次ぎ、彫塑繪畫は精妙の域に到り、之に伴うて工藝も皆進歩發展せり。されば曾て毘陀羅に於て東西特長の融和したりし、もしくは亞細亞各地に發生したりし美術の精華は、相率ゐて我が邦に注入し、こゝに凝つて奈良朝の美術を作り、わが文化史、わが藝術史に於ける最も誇るべき時代となりにき。而して豪華を好み、政教一途の皇謨を實行し給ひし聖武天皇の御宇なる天平時代は、實にその高潮期なりけり。嗚呼一木一草皆これ舊都の遺物ならざるはなし、流鶯飛燕豈敢へて九重の春色を飾りたるものと類を異にせんや。落

政教一途の皇謨
高潮期

鴉尾

日の光は唐招提寺の鴉尾に映じて、秋篠寺の晚鐘は春の入相を告ぐ、物靜かなる奈良の舊都は今や暮靄の裡に沈まんとす。

七 萬葉時代の歌人

柿本人麿は其の傳詳あらず、持統、文武の二朝に仕へて、官位甚ど高あらず、後に石見に住し、そこにて終まりといふに過ぎず。されどその歌は多く存して金玉の響を傳ふ。殊に長歌は人麿の擅場にして、文辭の端正、格調の雄大、梅櫻桃李並び咲きゝる萬葉集中、一人のその右に出づるものあし。以て古今に獨歩すべく、以て千古に歌聖とすべしといへども、渠の

長歌

梅櫻桃李並び咲く
(隱喩法)

歌聖

即興

低級文學

祝詞
格調

九鼎大呂より
も重し(引喩法)
毛先生一至楚使
趙重於九鼎大呂
(史記)

山水の癖
(提喩法)

自己を没却す

上下三千載を通じて唯この人ありと稱せらるゝ所以は、ま
ゝ別に理由あり。我が國和歌の弊は即興を主とするにあり、
一時の感情を吐露するにあり。故に動もすまば輕浮に流き、
露骨に失し、淺膚にして儀容を缺るゝ一種の低級文學さら
んとは。人麿これを慨し、斯道の爲に正々堂々の陣を張り、蕩
逸浮華の風に代ふるに沈痛幽玄の調を以てし、森嚴莊重な
祝詞の格調を捉へ來りて、その長歌に投じぬ。即ち筆を天
地開闢に起し、天孫降臨に説き始め、滔々數千言を陳ぬ。雄偉
と莊嚴とは斯くして成まり。人麿一とび出でて和歌の價値
九鼎大呂よりも重し。

人とは。彼性もと山水の癖あり。屢杖を曳いて天下の勝地に
放浪し、近畿にては吉野宮、難波宮はいふに及ばず、遠く紀州、
播州に行き、富士の秀容を仰ぎ、西の方道後の温泉に遊べり。
遊ぶごとに懷をやりて情を述ぶ。一生の作旅行に關するも
の甚ど多し。

その特色は人麿が雄大莊嚴を旨とせるに反して、飽くまで
優美可憐の情を喜べるにあり。人麿が痛切熱烈なる感情を
主としるるに反して、悠揚として迫らず、よく自己を没却し
て、山川と同化しるる所にあり。我が和歌の紋景の一面は洵
に彼によりて開拓せられりといふも不可なるべし。赤
人の大なる所こゝにあり、人麿に譲らざる所以もまゝこゝ

に存す。

山上憶良は赤人と時代を同じうして、嘗て遣唐少録として入唐し、歸朝後東宮の侍讀たりし人にて、漢文學に精通し、従つて外國思想の感化を受けたること萬葉歌人中の隨一たり。此の點に於て彼は人麿、赤人と徑路を異にせり。憶良の長所もまた長歌にありて、時に人麿の壘をも摩せんとするものあり。思想は人麿に比すきは漸く複雑となり、取材亦多方面にして、人倫の道を教へ、人生の無常を説きたるもの少あらざる。如きは、明に外國文學の影響なり。人麿は格調に長じ、憶良は思想に於て優まり。若し彼の格調と此の思想とを打つて一丸とせば、萬葉集の光彩益、陸離たるものありしならん。

徑路を異にす

(提喻法)

壘を摩す

(提喻法)

打つて一丸とす

(隱喩法)

操觚

大伴家持は人麿、赤人の如く操觚専門の歌人にあらずして、政治史の上より見ても看過すべからざる人物なり。故にその歌を讀むものは渠が政治的經歷と關聯して玩味するを要す。

天稟

家持の歌の最も見るべきものは、彼が越中守の任果てて京に歸り、政治界の中心に進みいでたる時にして、官位漸く高くして、社會に對する自己の何者たるかを意識すると同時に、歌人としての天稟もまた十分の發達を見たり。宗廟を敬ひ、祖先を尊ぶは、我が古來の美風、大伴氏はその先道臣命に出でて、金村が大連となりたるを始め、大化の改新に大臣た

國民的特性

りしものあり、壬申の亂を戡定したるものあり、世々功臣を出して樞要の地位を占め來りしが、藤氏權を得るに至りて漸く勢を失ひ、子孫慷慨の士を出すもの多し。海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、顧みはせじの句の如きは、國民固有の性情を歌ひて、武士道の由りて成る所を示せるものといふべし。家持が人麿、赤人と並びて萬葉の上に重要な地位を占むる所以のものは、一に國民的特性を歌うて、詩味横溢せるが爲に外ならず。

八 鎌倉

絹張山ヌシヤマにさく花も、扇谷ウシノヤにちる紅葉も、移り行く世の常なき

示すならし

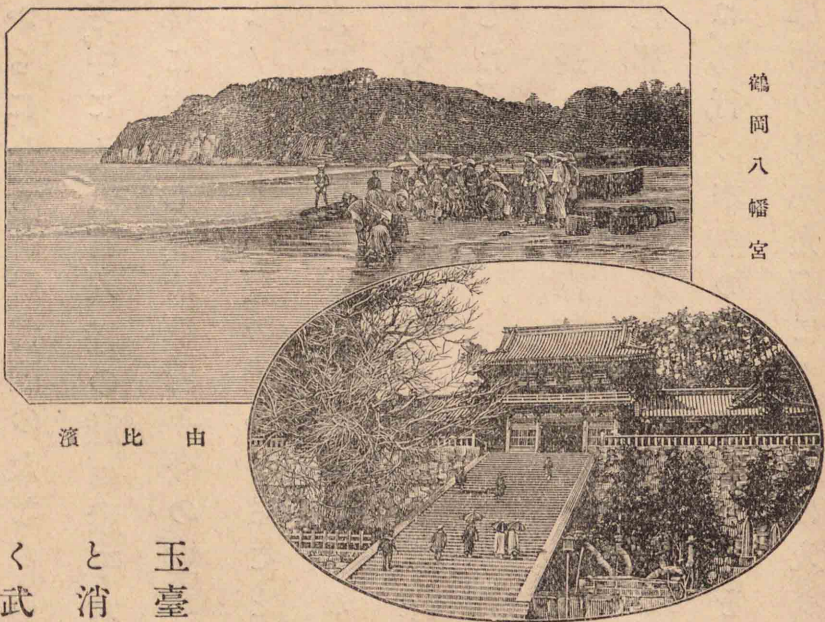
星月夜ホシツキ（枕詞）

離々

黄梁一炊の夢

武門棟梁

鶴岡八幡宮



由比濱

さまをや示すならし。まことや星月夜鎌倉山の世に輝きたるは、雲居るかの昔にして、彼の政所の跡は離々たる禾黍の島となり、時めける人の名は寂々たる塔婆の石に残れるのみ。されば

玉臺金樓の榮は黄梁一炊の夢と消え果てたれど、さすがに永く武門棟梁の居たりし處なる

康平六年は一七
二三年
治承四年は一八
四〇年

蕨繫の供

いやちこ

たぐふ

からに、今も神社佛閣の大なるありて、名所舊蹟はた少か
む。中にも若宮八幡の社は康平六年の鎮座にして、初は由比
郷に在りしを、治承四年今の處に遷されしより、松柏の翠い
よく、繁く、蕨繫の供かくることなし。丹塗の樓門は光を日
光に争ひて、神威のいやちこなるさまを表し、御前の放生池
は碧を大空にたくへて、靈徳の深くひろらかなることを示
しぬ。

勤行

眞如の月の光

建長寺は大覺禪師、圓覺寺は佛光禪師の開基にして、その大
檀那は即ち北條氏なりきとかや。殿堂相望みて、廊門軒を連
ね、勤行の木魚の音幽にして、世をへだてし雲の奥より洩れ、
眞如の月の光朗にして、定に入りし禪の扉を照せり。由比濱

白帆の影沖に
滅ゆれば漁火
遙に波をこが
し、網引の聲
磯に絶ゆれば
筥屋の煙斜に
渚を蔽ふ
(對偶法)

あなり

に立出づれば、白きいさご、緑の松に色はえて、左の渚の末な
る磯松山は三崎に陸を並べて打續き、右の海面にさし出で
たる稻村崎は繪島と海を隔てて立ち對ひ、白帆の影沖に滅
ゆれば、漁火遙に波をこがし、網引の聲磯に絶ゆれば、筥屋の
煙斜に渚を蔽ふ。すべて此のわたりのけしき、あはれといふ
もあろくあり。

何處の状を見るにつけても、懷舊の心淺かゞざるが、殊に悲
しきは、岩倉山の麓ある二階堂、谷の土室にこそあなりけれ。
そも此の土室の入口は、身を縮むるばかり狭けれども、中に
は疊六枚はかりもや敷かれぬらん。あはれ此の土室は建武
の昔、護良親王の弑せられ給ひつる跡なりとよ。親王はかし

柔和忍辱

時つ風

こゝらの月日

葉末の露と
(隠喩法)

こき御あたりにならね、天台座主とも仰がれ給ひしを、
朝敵征伐の御爲に柔和忍辱ニツクミニツクの法衣ホウイを甲冑ケウにぬぎ替へ、遠く
芳野の雲を押し分け、信貴の岩根を踏み平ナして、一度は御國
を鎮め、叡慮を安んじ奉り給ひけるが、再び起る時つ風、竹の
園生を吹き荒し、かゝるいふせき土室に、こゝらの月日をす
ぐさせ給ひて、遂に稻妻のきらめく亦、葉末の露と消え失
せ給へるなむ、いともいたましき事の限なる。(鐸堂隨筆)

九 鎌倉時代の文學

鎌倉時代のうち、文壇の最も賑ひたるをその初三四十年と
す。時に後鳥羽天皇帝室の式微シキビを憂へ、銳意事に當り給へば、

元久二年は一八
六五年

新古今和歌集

延喜五年は一五
六五年

時流

軍記物語

都人も前途に希望を有して、新に活氣を生じ、文藝もこれが
爲に一時の盛況を呈せり。その最も盛んなるは和歌なり。元
久二年後鳥羽上皇の勅によりて、藤原定家、同家隆等新古今
和歌集を撰ず。延喜よりこの時まで和歌の勅撰八度に及び
しが、その中古今と新古今と殊に勝れたりと稱せらる。
上の好む所下これに靡き、有名なる歌人輩出せり。攝政良經
は清新の歌風を以て時流を代表し、その叔父僧慈圓は西行
に學びて、好んで佛教の趣味を含め、將軍實朝は萬葉の古調
を愛しぬ。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽高か
りき。
殊に注意すべきは軍記物語の勃興なり。平安朝の半ばより

和漢混交の文

源平盛衰記

保元物語
平治物語
平家物語
源平盛衰記
諷誦

漢學漸く衰へ、上流の人は尙これを第一の學問としたれども、多くは純粹なる漢文を書き得ず。こゝに和漢混交の一文體生ぜり。衰ふるは興る基にして、この文體は國文の優美に漢文の適勁を加へ、幽玄なる佛語をさへ交へて、直截簡明の文を創製せり。この混交體の大いに光彩を放ちたるは、源平争鬪の始末を記したる軍記物語なり。そもく源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものの感懷はうたゝ假作小説よりも深し。こゝに於て軍記の作あり、その最初に出でたるは保元物語、平治物語にして、文章や質實なり。ついで平家物語、源平盛衰記の作あり、この二書は大體組織を同じくすれども、平家は諷誦せんが爲に悽惋の調を加へ、盛衰

繁縷

史實

この一篇、多く西行の歌を材料として引喩法を用ひたり

行方定めぬ浮雲は風のまにまに岫を出で入る (隱喩法)

道のべの清水流るゝ柳蔭暫しとてこそ立ちどまりけれ
古畑のそばの立つ樹にゐる鳩の立友呼ぶ聲のすこき夕暮

記は記事の委曲を盡さんことを期せしため、稍繁縷の弊あり。これらの軍記類は史實によりて、しかも史實に拘泥せざ、詞源萬斛、文藻湧くが如く、歴史としてよりも文學としての價值大なり。

鳥の啼きけは南のまに 依れば養清 則

一〇 西行法師

行方定めぬ浮雲は、風のまにまに岫を出で入る、世の榮辱を思ひ捨て、境に従ひて物に着せず、一生を行脚に送る身の心安さよ。暑さに惱みては道のべの柳蔭に清水を掬ひ、宿とり後れては古畑の立つ樹に友呼ぶ鳩を憐む。高野は眞言第一の靈蹟とて足を留むれども、こゝもまたつひのすみかなら

何ごとのおはし
ますかは知られ
ども辱さに涙こ
ぼるゝ

ず伊勢に詣でて辱さの涙を御裳濯の流に注ぎ熊野を巡り
て木の下に華山の帝を偲ぶ櫻をめでて幾度も上りたれど
もなほ、

吉野山おその葉の道かへて、

まど見ぬ方の花茂尋ねん。

といひ結縁の爲とて観音の御堂に通夜して、

時鳥きゝよとしてしもおもらねど、

初瀬北山たよりありけり。

と耳を聳つ。仁安三年の冬は四國遍歴を思ひ立ちぬ。賀茂の
御社に暇申し住吉の御神に幣手向けて西の方へ杖を曳け
ば磯の松風はや肌はに寒し。

結縁

仁安三年は一八
二八年

昔みし野中の清
水がかはらればの
ひ出づらむと思

新院は崇徳上皇

八重葎

淡路島せとの潮干の夕暮に、

須磨より通ふ千鳥なく飛り。

書寫に詣でしを昨日のことと思ふにはや一昔になりぬ野
中の清水にわが影の老いたるを思ひ山を越え海を渡りて
讃岐の國に着きぬ。松山の津に新院はわびしき世を過した



西 行

まひしぞと聞きて、
行きて尋ねれども、
八重葎さへ霜枯れ
てその跡としも見
えず。白峯といふと
ころに陵ありと海

これや...名
残なる

賤山がつ

文治二年は一八
四六年

思ひきや

人の知らするを便に、松杉の間を分け登れば、これや紫宸、清涼の玉臺に四海の主とかしづかれたまひしその聖帝の名残なる。賤山がつの墓かとはかり、志るしの石も落葉に埋れて、幽鳥空しく飢になく。袂におつる村時雨、涙の露もきほひつ、誦經の聲もぬれにけり。

その後都に歸りてありしが、文治二年の秋たてば、この度は東の方へ出で立ちぬ。鈴鹿山、鳴海瀉もはやあとになりて、遠江の國に入れば、こゝもまた昔過ぎしところなり。

年たたりてまゝ越ゆべしと思ひきや、

此れちなりけり、小夜の中山。

久能の山、清見が關に月をめ、富士の高嶺は見かへりがち

故人

にして、箱根の山も過ぎぬ。大磯、小磯の浦々を見るも故人にあふこゝちなり。さきに、

心なき身ふを所それの志られけり、

鳴たつ澤の秋のゆふぐき。

と詠みしも、このあたりぞかし。この頃都にて歌集の勅撰あり、わが歌も選ばれぬるが、この歌は選に上らずと聞けば、ゆかしくも覚えて、京に歸らず。鎌倉にては右大將の、珍しき客かなと留めたまひしかど、一夜をこゝに過ししのみ。賜はりし銀の猫も門外に遊べる兒どもに與へて、飄然として奥の方へぞさまよひゆきける。

西行法師
の歌集

右近衛大將源頼朝

過ししのみ

奥の方へぞさまよひゆきける

一一 奥の旅路

元祿二年は二三
四九年、徳川綱
吉の時

すう。

末の七日

光をさまれる
ものから

いつかはと心
細きを

さり難き臆

路次

わりなし

元祿二年、奥羽長途の行脚思ひたちて、取る物手につかず、股引のやぶれをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるよ、松島の月まづ心にかゝる。彌生末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峯かすかに見えて、上野、谷中なかの花の梢復ないつかはと心細きを、むつまじき人々に送られて出て立つ。瘦骨やせこの肩に物多きを厭へど、紙子一衣ヒトヒは夜のふせぎ、浴衣、雨具、墨筆のたぐひ、あるはさり難き臆など、さすがにうち棄てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

風騒の人

あやめふく日
(換喩法)

神龜元年は一三
八四年

日數重るまゝに、白河の關にかゝりて、旅心定まりぬ。この關は昔より名高きところにして、風騒の人、心をとゞめずといふことなし。秋風を耳に残し、紅葉をオモカケ佛にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙オモカケに、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞむる。

仙臺に入れるはあやめふく日なり。一日そのあたりの名所見めぐる。宮城野の萩しげりあひて、秋の景色おもひやらる。玉田、横野、つゝじが岡は馬醉木ウケヒさく頃なり。薬師堂、天神の御社など拜みて、その日はくれぬ。

多賀城の碑は高さ六尺餘、横三尺ばかり、苔を穿ちて文字幽なり。四維國界の里數をしるす。此の城、神龜元年、歲次甲子、按

天平寶字六年は
一四二二年

歌枕

羈旅

察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年、歲次壬寅、參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獮修造也。天平寶字六年十二月一日とあり。昔よりよみ置きける歌枕多く語り傳ふと雖も、山崩れ川流れて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはりたれば、時移り代變じて、その跡たしかならぬことのみなるを、疑もなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す、行脚の一徳、存命の悦、羈旅の勞を忘れて泪おつるばかりなり。

それより野田の玉川、末の松山を尋ね、鹽竈の浦に入相の鐘をきく。五月雨の空聊か晴れて、夕月夜幽かに、籬が島も程近

境、景

扶桑

く、蟹カニの小舟こぎつれて、さかな分つ聲々あはれなり。あくる日の早朝、鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしき立て、彩椽イロノハきらびやかに、石の階九仞に重り、朝日朱の玉垣を輝かす。かく道のはて、塵土の境まで、神靈あらたにましま



燕 芭

すこそ、我が國の風俗なれと、いと尊し。船をかりて松島に渡る、その間二里餘、雄島の磯につく。

抑、ことふりたれど、松島は扶桑第一の好風

吹きたわめられて

雉兔芻蕘

にして、洞庭、西湖には恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數をつくして、欵つものは天を指し、臥すものは波に匍匐ひ、二重に重り、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめられて、屈曲ことさらに撓めたるが如し。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。雄島が磯に立寄るほど、月海にうつりて、晝のながめ又あらたまる。江上に歸りて宿を求め、窗を開きて風雲の中に旅寝すれば、あやしきまで妙なる心地して、眠らんとしてひねられず。それより平泉へところざす。人跡稀に、雉兔芻蕘の往きか

そこともわか

天皇の御代榮えむと東なる陸奥山に黄金花咲く大伴家持

三代は藤原清衡、基衡、秀衡なり、其の泰衡に滅びて頼朝に滅さる

泉三郎親衡

ふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石卷といふ湊にいつ。黄金花咲くとよみて奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつゞけり。思ひがけず、かゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更にかす人なし。漸く貧しき小家に一夜を明して、あくれば又知らぬ道まどひゆき、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に到る。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す。まづ高館に登れば、衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて南部より流る。北上川に落ち入り、泰衡が舊跡は衣關を隔てて、南部口

國破れて山河在り、城春にして草青みたり(引喩法)

をさしかたため、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河在り、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時の移るまで泪をおとし侍りぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。

經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、新に四面を圍み、藁を覆ひて、風雨を凌ぎ、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨のふり残してや、光堂。

(奥の細道による)

珠の：(隱喩法)
金の：(隱喩法)

一二 孔子の好學

孔子は非常に學を好めり。自ら晩年に至りてその一生を回顧して曰く、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩と。その進歩の跡歴々として想見すべく、終生刻苦勵精せしことまた推測するに難からず。

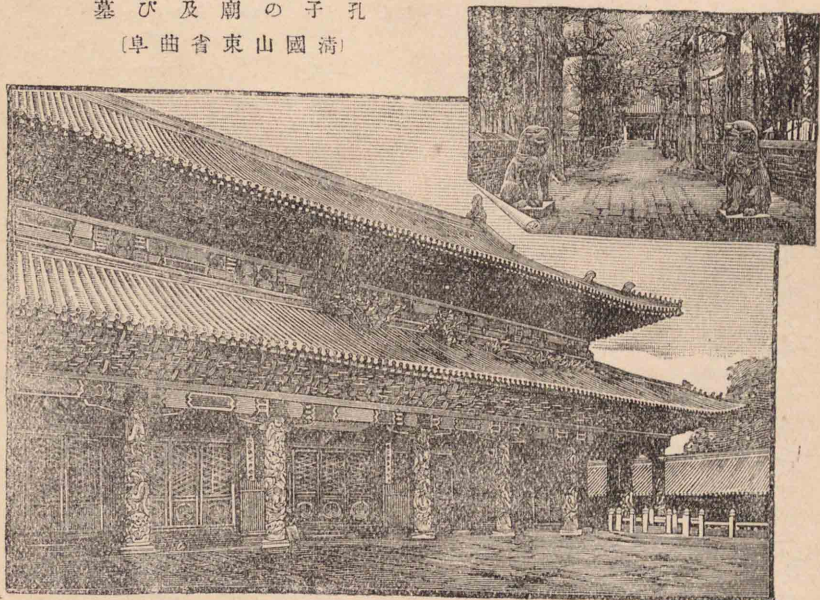
孔子がいかに學問に熱心なりしかは、左の二語によりて明瞭ならん。

吾嘗終日不食、終夜不寢、以思無益、不如學也。

十室之邑、必有忠信如丘者焉、不如丘之好學也。

旦暮

孔子の廟及墓
[清國山東省曲阜]



特に孔子は周公を追慕し、一たびその事業を回復せんと欲して、旦暮懐に忘るること能はず、遂に夢寐の間にも之に見ゆるに至れり。

甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公。

その道を求むる志願の懇切なりしことは、

朝聞道、夕死可矣。

にて知了すべく、その好學の念慮は晩年に及びて益熾盛なりき。

葉公問孔子於子路、不對、子曰、女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至、云爾。

孔子の幼少より勉學せしは、主として詩書禮樂なり。然るに支那には古來易學ありて、哲學思想を養成し來れり。孔子の知識慾に富める、詩書禮樂を講習せる傍、その四十五六歳の頃に至りて、之を研究せんとの志願を起せり。

加^改我數年、五十以學易、可以無大過矣。

後世、易が儒教に闕くべからざる一經書となれるを以て考ふれば、孔子は晩年に及びて、善く之を精讀し、善く之に通曉

經書
通曉

易學
知識慾

宋儒
生知安行

せしが如し。

上來論述せる所によれば、孔子が終生勉學せしことは、疑ふべからざる事實なり。然るに後世、宋儒孔子を尊崇する餘に、之を以て彼等の理想的人物となし、生知安行、毫も修爲を要せず、その自ら學を好むといへるは、世の學者を獎勵する意なりとせり。獨り宋儒のみならず、孔子の生時既にその博學多能なるを見て、之を生知とせしものありしが如し。

我非生而知之者、好古敏以求之者也。

といへるもの、孔子がこの謬見に對する辯疏なり。孔子不世出の偉人なりと雖も、固より經驗を待たずんば知識を得ること能はず、修爲を経ずんば徳器を成すこと能はず、世豈生

謬見
不世出

知の聖人あらんや。

(蟹江義也)

一三 釋迦の奮闘

凡そ人は立志の困難なるにあらず、唯遂行するを困難なりとす。志を立つる者は千萬あれども、志を遂ぐる者は十百に足らざるは、抑、何故ぞや。要するにその志を妨ぐる悪魔と闘ひて勝利を得る能はざるが故なり。試に吾人が社會的事業若しくは個人的事業に於て、一の目的を定め、一の志望を懷きて、その業に着手すとせよ。内外兩面より、意外にも種々困難なる事情の簇生するに會ふものなり。而して山高ければ、吹き來る風も亦強きが如く、事業大いなれば、途に當る障害

山高ければ吹き來る風も亦強きが如く
(直喩法)

も亦大いあり。

抑、釋迦牟尼佛はもと悉達太子といひて、印度迦毘羅國王の子なりき。その榮華を極め歡樂を盡したる身にて、決然として衆生濟度の大願を起したる時の意中、果して如何なりしか。この際に臨みては、その前路を妨ぐるもの悉く皆これ悪魔なり、一門眷屬、金殿玉堂、美酒嘉肴、百官群臣、何ものかこれ漏れん。左抵右牻その周圍は悪魔を以て充されたれども、太子の大願は百萬の魔軍も支ふること能はざる強力ありしなり。太子にこの強力ありしゆゑ、群魔の攻撃にも誘惑にも障へられず、遂に成道の果を得たり。

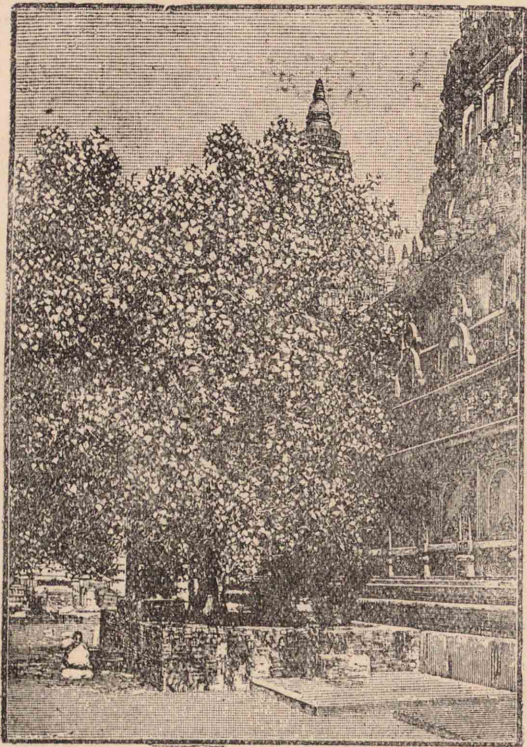
出家已後の六年間、煩惱尙ありと云ふことは、その形跡には

衆生如何なりしか
(設疑法)

左抵右牻

煩惱

見えざれども、正覺成就の時まで未だ滅せざりしなり。傳に依るに幾多の悪魔群をなし、或は俗世の物質的快樂を説い



佛陀伽耶那釋迦成道地菩提樹

難ありと報ずるあり、或は種々異様の形を現じて恐怖を感ぜしめんとするあり、太子の精神を攪亂せんとする手段は

てこれを誘ふあり、或は父淨飯王に不幸ありと告ぐるあり、或は妃耶輸陀羅、或は伯母波闍波提に災

至れり盡せり
(反復法)
人格的天魔

涅槃

恐らくは：
：：：なりしな
らん

颶風いかに強
くとも富岳の
泰然として動
かざるが如く
(直喩法)

至れり盡せり。蓋しこれ外界に於ける人格的天魔に託して、太子意中の煩惱魔を形容せしものならん。此の如く、太子の意中一方に涅槃を求むる意切實なれば、随ひて他の一方に煩惱魔の熾盛なるありて、甲乙兩思想の衝突斷えざりしこと、殆ど六年の長きに及びぬ。

愈、三十五歳の二月八日となれば、菩提樹下に於て、この兩思想の勝敗を判つべき最後の決戦は開かれたり。この時恐らくは宇宙の萬物皆悉く太子の意を挫折せんとする悪魔となりしならん。然れども颶風いかに強くとも、富岳の泰然として動かざるが如く、太子の意中には一點の傾動だになかりき、啻に傾動なき乃みならず、現れ來る悪魔は内となく外

となく、皆悉く鑿殺せられしなり。太子の精神的勇氣の無雙なること、實に驚くべきものありと謂はざるを得ず。

(村上專精)

一四 天才

世に先んずる一分の才あり、俗を抜くこと半歩に過ぎずとも、この材幹を振ひ、その見地に住せざるものは、天の己を空しうせざるに、進んで天を空しうせる責を負はざるべからず。天に負かざらんと欲せば、一分は一分の争を敢へてせざるべからず、半歩は半歩の戦を挑まざるべからず。一分の人も半歩の人も、均しくこの戦争を経んが爲に、天意を以て人間に生れたるものなり。然れども戦争は畢竟戦争に過ぎず、

見地

天下は泰平なればなり

(誇張法)

君子は凡庸の驍將にして

(警句法)

戦争のうち成功の意義を含めることなし。従つて俊才奇傑往々にして中道に挫折して、凡庸の群に入る。凡庸の群に入る時、天下は泰平なればなり、凡庸も處世の方針として最も安全なればなり。古説に君子危きに近よらずと云へるは、これが爲なり。君子は、凡庸の驍將にして、かの損害を恐れ、財帑を土中に埋めて、貧を守る士とその趣を同じうす。安き事之に過ぎたるは無くして、癡なる事之に及ぶものなし。

意識

君子の事は余之を知らず、天才の意識に至つては、出處顯晦、君子人の如く、まかく如意なる能はざるが如し。彼等は成功と失敗とを顧みる餘裕なく、一意に自己を實現せんと欲し

能才

て己む能はざるものなり。資性既に然り、狂と呼ばれ、愚と呼ばるゝを好まずとも、之を奈何ともするに由なし。而して天才の意識する所は、能才のそれよりも世俗を距る事一層遠きが故に、之を貫かんが爲には、水準以上の猛烈なる争鬪を敢へてせざるべからず。この點より觀察したる天才は、人間として最も不幸なるものなり、憐むべきものなり。

謳歌

吾人が天才を謳歌するは、之を遙なる天の一方に安置して、その既成事業の餘光がわが頭上を射るに、回頭し、低回し、想像して、遂に思慕の情を起すに過ぎず。自ら進んで天才となり、もしくは之を羨んでその位置を得んと欲して謳歌するは、誤れるの甚だしきものなり。今人の認めて天才となすも

誤れるの甚だしきもの

後昆

のを過去の歴史に求むるに、孤憤、窮愁、奮闘、迫害の痕迹は瞭として争ふべからず、燦として滴々の血に苦痛の一生を後昆に遺すが如し。

斷蓬

然れどもこれ單に世に傳れる天才に就きて言ふに過ぎず。もしそれ傳らざるものに至つては、世俗の反抗を受けて、江湖に漂浪し、閭閻に沈淪して、斷蓬の如くならざるもの、殆ど稀なり。古より今に至つて、草莽に埋没し、陋巷に湮滅せる天才の數は、蓋し擧げ易からざる程に夥しからん。天才の出づる、必ず歓迎を得べしとは、——少くとも死後に必ず謳歌せらるべしとは、誤れる世俗の斷見に屬す。彼等は今代に傳れる天才の外に、天才は未だ曾て生れたる事なしと思へばな

斷見

り。

生涯の意義は無なり

余の見る所を以てすれば、天才にして生前に名なく、身後に傳らざるもの、十の二三に留らざるべし。但し彼等は名を顧みて動くにあらず、動かずんば生涯の意義は彼等にとつて無なるが故に動くなり。天才は最も執着心に富めるものなるが故に、彼等の戦争は必ず猛烈なり。而して衆寡敵せざるは一般の原則なるが故に、天才の多くは猛烈なる戦争を命のあらん程持續して、遂に窮迫に斃るゝ事多しとす。

(夏目金之助)

一五 義時教訓

さても院のおぼし構ふる事、忍ぶとすれどやうく、漏れ聞

院は後鳥羽上皇

檢非違使
判官
中務卿
延嗣

すべかめり
かつく
御かうじ

身の失すべき
時にこそあな
れ

公ときこゆ
宿世

えて、東さまにもその心づかひすべかめり。東の代官にて、伊賀判官光季といふ者あり。かつくかれを御かうじの由仰せらるれば、御方に参る兵どもおし寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ、院はおぼし免しける。
東にもいみじうあわてさわぐ。さるべくて、身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、對手の攻め來りなむ時に、はかなきさまにて屍をさらさじ。公ときこゆとも、自ら志給ふ事ならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて、都にのぼす。

清きしに
人にうしろ見
えなむ
うしろめたき
心やはある

またの日
馳せ來たり

泰時を前にするていふやう、おのれをこの度都に参らする事は、思ふ所多し。本意の如く清きしにをすべし。人にうしろ見えなむには、親の顔また見るべからず、今をかぎりと思へ。賤しけれども、義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横さまのしにをせむ事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば再びこの足柄箱根山は越ゆべしなど、泣くくいひきかす。まことに志かなり、復親の顔拜まむ事もいとあやふしと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎり、あはれに心ぼそげなり。かくてうちいでぬるまたの日、思ひがけぬ程に泰時只一人鞭を上げて馳せ來たり。父胸うちさわぎて、いかにと問ふに、

大方の掟

参りあへらば

侍るべからむ

とばかり

かしこまりを
申す

たまはせば

軍のあるべきやう、大方の掟などをば、仰の如くその心を得
侍りぬ。若し道のほとりにも、測らざるに辱く鳳輦をさきだ
てて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らむに参りあ
へらば、その時の進退いか、侍るべからむ。この一事を尋ね
申さむとて、一人馳せ侍りきといふ。義時とばかりうち案じ
て、賢くも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に
向ひて弓を引くことは、いか、あらむ。さばかりの時は、兜を
ぬぎ、弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して、身を任せ奉
るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵をたま
はせば、命をすてて、千人が一人になるまでを戦ふべしとい
ひもはてぬに、急ぎたちにつけり。

（増鏡）

一六 新島守

土佐院は土御門
天皇、佐渡院は
順徳天皇

從へ給へりし
程

あはれび

津の國のこや
の
難波の葦の
（序詞）

後鳥羽院の四つよて位に即き給ひて、十五年たそくましき。
おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は
同じ事なりしうば、をへて三十八年、程、六の國にあるじと
して、萬機のまつりごとを御心一つよ治め、百のつかさを從
へ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりもまされる
御有様にて、遠き茂ゆそれび、近き茂なで給ふ御めぐみ、雨の
脚よりもまだければ、津の國のこやのひまなきまつりごと
をきこしめすよ、難波の葦に亂きざらむ事をたぼしき。
貌姑射の山比峰の松もやうく、枝をつらねて、千代よ八千

おはしましぬ
べかりける世
都をさへ立ち
別る

けぶり

まいて

代をかさね、霞の洞に御すまひ幾春を経て、空ゆく月日の
限しらず、のどろくたそくましぬべりりける世を、ありく
て、よくなき一ふしに、今のかく花の都をさへたち別き、おの
がちりく、よさすらへ、磯の苫屋小軒をならべて、おのづか
らみととふものとして、浦よつをする蟹小舟、鹽焼くけぶ
のなびく方をも、わがふる里の志るべよかとはかり、なほめ
過させたまふ。御すまひどもは、それまでと月日を限りたら
むだに、明日知らぬ世のうしろめささに、心と心ぼろかるべ
し。まいていつを果とあめぐり逢ふべきかぎりだになく、雲
の浪、煙の波に幾重ともしらぬ境、世をつくし給ふべき御
さまども、くちをしとふもおろあなり。

けしきばかり
事そぎたり

いづこにもすま
れすばたに住ま
であらむ柴のい
ほりのしほしな
る世に 西行
なまめかし
水無瀬殿は山城
國、山崎の西
三五夜中新月
色、二千里外故
人心（白氏文集）
こちたく

みのおそくす所へ、人離れ里遠き島の中なり。海づらより
は少しひき入りて、山陰にかさそへて、大きやあなる巖のそ
ばさてるを便にて、松の柱よ葦ふたる廊など、けしきばかり
事そぎたり。まことに柴のいほりのたゞ志ばしと、かりそめ
に見わたる御やどをなれど、さる方になまめりしく、あゑづ
きて志あさせ給へり。水無瀬殿おぼしいづるも夢のやう小
なむ、はるくと見やらるゝ海の眺望、二千里の外も乃こり
なきこゝちする、今更めきたり。潮風のいとおちさく吹きく
るをきこめして、

われこころはにひ島守よ、おきの海に
あらし浪風あゝろして吹け。

同じ世よまゝまゝの月の見む、
今日こそよそにむきの島守。

(増鏡)

一七 漁夫

藻鹽
みなれ棹
權

ふみ月夏の海の香の 藻鹽に匂ふ夕まぐれ、
兄もろともに舟うけて 力をふるふみなれ棹、
ゆづれ舟出は勇ましく、 波間にひゞく權の歌。
うなづら見れば影動く 深むらさきの雲のいろ、
はや暮れて行く天際あまざはに ゆくへや遠き鶺鴒はやぶさの
もろ羽はあやに映ろひて、 こがねの波にたゞよひぬ。

見えわく
かつ

ますらを

はらふごと

うしほをてらす篝火の きらめくかたを窺へば、
松の火あかくもゆれども、 魚ゆく影は見えわかず、
ながれは急し、ふなべりふ 觸れてかつ鳴る夜の浪。
また、くひまに風吹きて 舞ひたつ雲をたとふれば、
軍にのぞむますらをの あるは鉦かねうち、貝をふき、
あるは太刀はき、劔とり、 弓矢を持つに似たりけり。
戦ひすゝむものゝふ乃 劔の霜をはらふごと、
溢るゝばかり奮ひたち、 潮をうちて漕ぎくれば、

梁はふたりの盾にして、

舵はするどき刃なり。

刃
梢

さかまく波は西風れ

梢をふるひふることく、

舟は枯れゆく秋の葉の

枝に離れて散ることし。

をる

帆檣なかばをれくだけ、

箒は海にたゞよひぬ。

怒りてくるふ大浪は

たけき心も傷ましむ。

今はた權をうちふりて

波とたゝかふ力なく、

死して仆るゝ人のごせ、

身を舟板に投げふせぬ。

仆る

あゝ過ちぬ、よしや身は

おろかなりとも、かくて吾

よしや身はお
ろかなりとも

もろく果つべ
き命かは

もろく果つべき命かは。

照る日や月や上にあり、

大海神もこゝろあらば

賤しき吾を見そなはを。

砕かば砕け、いでさらば

波うつ權はこゝにあり、

たとひ舟路は暗くとも、

世に勝つ道は前にあり。

あゝ新潮にうち乗りて

命運を追うて活きて歸らん。

(原詩節略、島崎藤村)

一八 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼兼が討たれし後、召し捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、隠謀の企

朝臣

今度の白狀

たとひ舟路は
暗くとも

専らかの朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に復六波羅に召し捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも赦されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝあ、二つの間をば離れじと、思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寢となればをのうきに、恩愛の契淺からぬわが古郷の妻子をば、行方も志らず思ひ置き、年久しくも住みなれし九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀なる。

憂きをば留めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打

落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣て歸る嵐の山の秋の暮
(隱喩法、對偶法)

以下道行ぶりの文、盛んに掛詞を用ひたり

出の濱沖を遙に見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く身をうき舟のうきしづみ、駒もとゞると踏み鳴す、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にも老蘇の森の下草に、駒をとゞめてかへりみる古郷を雲や隔つらん。番馬、醒井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、尙もる物は秋のあめ、いつかわが身の尾張なる熱田の八劍伏し拜み、潮干に今や鳴海渦、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に曳く人もなき捨小舟、沈

明けぬ暮れぬと

元暦元年は一八四四年

み果てぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮ゆふぐの入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡中將の東夷の爲に囚れて、この宿に着き給ひしふ、

東路の埴生むらの小屋のいぶせきに、

ふるさといかに戀しうるらん。

思ひ残さぬ涙

と、宿の女がよみたりしその古の哀までも、思ひ残さぬ涙なり。旅館の燈火幽にして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が命なりたりと詠じつゝ、二たび越えし跡までも羨ましくぞ

思はれける。

足早み

轅

承久の役は承久三年(一一八二)

隙行く駒の足はやみ、日己に亭午に昇れば、餉進かきらする程とて、輿を庭前に昇かき留む。轅たもとを叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に因つて、光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、

今東海道菊河、宿西岸而終命、

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

龍頭鷓首

富士のれの煙は
なほも立ちのぼ
る上なきもの
は思なりけり
家隆

古もあゝるためしをきく川の
同じながれに身をやしづめん。
大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸
の嵐の山の花盛、龍頭鷓首カケシの舟に乗り、詩歌管絃カケシの宴に侍り
しことも、今は二度見ぬ世の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。
島田、藤枝にかゝりて岡部の眞葛裏枯れて、物悲しき夕暮に
宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。清見瀉
を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ浪の關守に、いとゞ
涙を催され、むかひはいづこ三穗ミホが崎、興津、蒲原うち過ぎて
富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに
比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干

や浅き船うけて、おり立つ田子のみづからも、うき世を遶る
車返し、竹の下道行きなやむ足柄山のたうげより、大磯、小磯
見おろして、袖にも波は波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれ
ども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き
給ひけき。
(太平記)

一九 夏の歌

いづかふなききてゆくらむ、時鳥
淀のわされば、まど夜深きに。
庭の面はまどかわるぬ、夕立の
空さりげなく澄める月をあ。

(玉生忠見)

(源頼政)

わぶ

心あてよ見し夕顔の花散りて、

尋ねぞわぶる、たそおきの宿。

(松平定信)

風ふけハ蓮のうき葉よ玉たまおねて、

涼しくなりぬ、ひぐらしの聲。

(源俊賴)

かの岡に草刈るをのこ、心せと、

今の咲くらむ、さゆり、あでしこ。

(清水淡臣)

今かさくらむ

東亞の伊太利
なり (隱喩法)

二〇 京都の山水と平安朝 その一

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行くところとして佳ならざるなきの中に、殊よ衆美を聚め、羣を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべてを

エキスにす

エキスにしるもの、規模の雄大、豪壯なるものは存せずと

いへども、擘麗幽婉の形態は備へざるなし。東よ近く比叡山、

如意嶽より三十六峰笑ふお如く、北よは鞍馬、貴船、氷室、鷹トビ、峯、

高雄の山々波濤の如く、西にや、隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、

松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃きなあるは

或は目覺むるやうなる櫻の入りまじるあり、或は紅燃ゆる

紅葉を織り込みるあり。一面の草の頂なる四明お嶽、春な

ほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日は照りはゆる

色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂お岡、北の船岡、西の雙

お岡は、大和の畝傍、香山、耳梨の三山の如く相並びてあふね

ど、子の日の遊よ小松曳く樂など、いつき劣々ぬところから。

目覺む
燃ゆる

照りはゆる

子の日の遊

少し

南よや、隔りて男山、こまよ對すれば國家鎮護の八幡宮宮
 柱太知りまして、仰ぐもかしこし。京の東端よ沿うて賀茂河
 の流、^{かん}糺の河合よ高野の支流を集めて、南よ珠を碎き去り、西
 よ少し離きて桂河、大堰の激湍よ清瀧を併せて琴の音涼し
 くまよ南よ向ふ。二河南よ合し、更よ淀の急流よ流き込みて、
 沈々として西の方難波をさして走る。茫洋する大海、浩蕩と
 る波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心よ與ふる材料よ乏し
 といへども、一面よりいへば、山のうちよこもりて、海を見ざ
 るは、まよそれだけの長所なくんばあらず。地の勾配や、急
 なれば、蘆間よ出で入る白帆の町の側を往來する眺なき代
 りよ、濁りて底の明あならざる河水を知らず。京の水はわけ

添ふ

山紫水明

朝な夕な

てアルカリ性の鑛物を含めるまよ、曝す布をも人の膚をも
 眞白ます。海そのものは清々れど、棄てざる塵埃を更よ岸よ
 うち上ぐるま藻の臭も添ひ、漁夫など居る處は見るまも嗅
 ぐま心地よあらぬこと多し。京都よ海あきは惜しむべ
 しといへども、海あくして清き京都は益、清きなり。
 山紫水明の語は、よく京都の景色をいひ表せり。何處の山水
 も日中より朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるな
 るを知らば、三面を山よして土地濕潤、水分を含むこと殊よ
 濃なる京都の朝な夕な、いよ變化よ富めるまは説明
 を須ひずして明なるべし。

二一 京都の山水と平安朝 その二

和煦

温帯の地といへども、大陸の内部は寒氣凜々たる冬期が、直
よ烈日赫々たる夏期となり、氣候激變して、その間よ和煦の
時季を見ゆ。海岸は温暖なるところ多きかはりよ、年中春の
如く秋の如くよて、夏冬の峻酷なる風物を感じゆ。四季交代
の順序の明あなること我の國の如きは少く、我の國よても
花も紅葉もなき浦曲などは、到底京都の四季のなごめの面
白きよしあぢ。春立つと思ふばありに、四方の山々霞こめ、空
の色、水の色さへ昨日よ變りて覺ゆ。若菜つみ、小松曳くも新
しき年の志るしなり。梅の花散りて、鶯老を告ぐまば、柳の緑

鶯老を告ぐ
(擬人法)

過ぎがてにす

公事
物詣

名越の祓

千入

桃の紅花の音信あわよしく、夢かとはあり青葉となりぬ。
垣の卯の花、花桶を過ぎあてよする郭公の、志ばらくして聲
もせむなりぬるは、時しりぬと分けてめでよし。五月雨よ軒
の玉水ひまなく、公事、物詣も途絶えあちなるに、晴るまばや
がて暑さの凌ぎあさき、それも一時、名越の祓に夏も終りぬ。
冷風よちて一葉の落つるよ秋を知り、野邊の千種、蟲の聲々、
月影さへも隈なくて、せりよなる物のあはまはまはこの頃ぞ
まさきる。千入よ染むる紅葉を秋の名残として、木がらし騒
おしく、淋しき冬の霜に痛み、雪に慰みて早くも年は暮れゆ
きぬ。
愛すべき山川の懷よ涵養せらまよるわが國民は、永く薰育

續年縛
長布
五色
電
物
杉
糸
糸
索

合奏

歌合

白馬の節會

曲水の宴
上巳の節

藥玉

重陽

の恩を忘れずして、自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷に注意せしこと、平安朝の如く著しきはあらざるべし。代々の撰集の部を分つや、四季は最も重んぜられり。花や月やその折々毎、合奏、歌合は絶えず。この時代より盛んなりし五節供も、起源は多く支那もあるべしといへども、よく國風は融化し、まさしく季節は調和しる遊樂なり。白馬の節會は勇ましく神々しく、曲水の宴の上巳の節となりたるもやさしく、端午は最も盛んとして、淀野ひきし菖蒲の根、競ひ、軒は蓬を葺けば、藥玉の簾まかりるも興あり。七夕の空澄み渡る頃、銀河を隔つる二星を仰ぎ、重陽は菊花の秋は驕まれるを愛して、吟誦夜の更くるを覺えず。近世は

愉悅

至りて算盤弾く丁稚、剃刀片手の下剃まで、梅咲くや、初雪やなど首をひねるは、自然を愛する國民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、まゝ一は千年以前の祖先の、深く四季折々の景色は愉悅せし結果なりといえざるべからず。社會の進歩するに従うて、人工を以て自然に反抗する力は増加す。これやめて文化の恩澤なり。今日開明の民は煉瓦の家屋風もするさむ、室内の煖爐春長へなれば、何處も北風のすさぶを知らん。夏は山地綠蔭深き處、海岸風涼しき處は暑さを避く。都會の住居軒ち續きては、月の盈ち虧け、星影の動くも氣づる。とへば東京の六ども、山といへば飛鳥山の外を知らず、杉はといへば削きる板とのみ思へる類

憧憬

多し。平安朝の京都はいまどかくの如く人口稠密ならず、文
 化進歩せしむ。従うてその住民も、人爲の力を以て自然を左右
 せんとするほどの慾望を有せしめて、却つて山川の美は憧
 憬せる本性はあくまで之は同化せんと試み、服飾の色彩、第
 宅庭園の配置、一は自然を模範と取る。平安人士の行動のい
 かに美しく、平安京の山紫水明と融和して、天人相映發せる
 めを見よ。人力を及ぶかぎり活動せしめ、鬼神を役して自然
 を己が用に供せしむるは、あまらの事ならず。自然は人間
 と近づめざるして、人間は自然と近づけり。かまらば工業を知
 らず、科學を知らず、人力の偉大なるを知らず、たゞ自然と屈
 從せり。屈從せるはならず、愛着せるなり。その愛着せるや、勞

京都は實務の
 地にあらずし
 て風流の地な
 り。平安朝は
 實務の時あら
 ずして風流の
 時なりき
 (對偶法)

働は餘念なき蟻の如くならずして、青天の下は吟哦する雲
 雀の如し。月卿雲客生活の苦痛を知らず、運輸交通の便は乏
 しき京都の地勢も不足を感じず。景色の美はあこが
 れて、鳥兔匆匆四百年、政治の實力はいつしあ出でて關東よ
 去りぬ。京都は實務の地はあらずして、風流の地あり。平安朝
 は實務の時あらずして、風流の時なりき。

二二 歌文の才

一 弓張の月

延喜の御時、古今撰せられしをり、貫之はさらなり、忠岑、躬恆
 など御書所よめさきて候ひけるほど、四月二日なりしあ

志のびね
つかうまつる

ば、時鳥もまど志のびねの頃なるをいみじうけうぜさせら
れ、貫之めしいどして歌つあうまつらしめ給へり。

ことなつはいあゝなきらむほとゝぎは、

このよひばありあらじとぞきく。

これがよし

おなじ御時よ御あそびありし夜、御前のみはしのもとに躬
恆をめして、月を弓張といふ心はなよのこゝろぞ、これあよ
しつあうまつきとおほせ言ありしあば、

てる月をゆみはりとしもいふ事は、

山べをさしていまばなりたり。

おほうちぎ

と申したるを、いみじう感ぜさせ給ひて、おほうちぎ賜はり
しを、かさにうちかくるまゝよ、

志ら雲のこのあゝよしもおりあるは、

あまつ風こそ吹きてきぬらし。

いみじかりしものあ影。さばかりのものを近うめしよせて、
勅祿たまはすべき事ならねど、ひとへに躬恆が和歌の道よ
ゆるさきさる徳にこそ。

二 大井川の三船

逍遙
作文
勅祿
たまはす
のたまはす

ひととせ關白道長の大井川よ逍遙させ給ひしよ、作文の
船管絃の船、和歌の船とわかたせ給ひて、その道よさへさる
人々をのせさせ給ひしよ、大納言公任のまゐり給へるを、道
長、大納言はいづきの船よかのらるべきとのたまはすれば、
和歌の船よのり侍らむとのたまひて、

をぐら山、あらしの風のさむけまば、
もみちのにしき着ぬ人ぞなき。
となむよみ給ひし。

みづからもものたまふなるは、作文の船よぞのるべありなる、
さて、かばありの詩をつくりたらまし、名のあるあむらむこ
ともまさりなまし、口をしかりなるわざかな。さても殿のい
づまよとおおもふとのたまはせしなむ、我なむら心おごり
せられしとのまひけり。一事のすぐるゝとよあるよ、かく
いづまの道よもぬけ出で給ひけむは、いよしへも侍らぬこ
となり。

(天鏡による)

つくりたらま
し
まさりなまし
心おごりせら
る

二三 國歌評釋

すみど川蓑きて下す筏士に、

霞むあしとの雨をこそ知れ。

霞みよさる春の朝、春雨は降まども止めやあよ音もなけ
まば、それと知る由なし、且糢糊として霞こわさりまば、ま
して見知るべくもあらぬよ、水上よりしづくくと筏士の蓑
きて來きるよ、始めて雨の降れるを知りぬとなり。打ちなむ
めさる様をさなむら寫し出でて、必ずしも上つ瀬より筏士
の蓑笠きて棹を筏の上よ横さへ、おのまむさきて思ふこ
となげよ居り、筏は水のみよく流まゆくも静けしなどい

加藤千隆の詠

糢糊

さながら

たむたく

髣髴

はず、只衰きて下す筏士といふ。去るもおのづから以上の景致は含められて、眼前は髣髴なり。佳境天才の筆よりて花を生じ、勝地靈腕よりてその名を不朽ならしむといふべし。

皇朝

武士の矢並つくるふ小手の上よ、

霰たばしる那須の篠原。

ものゝふは物部氏より出でたる語にて、物部氏は武を以て朝廷に仕へしより、後世は同氏ながらも武士をば皆物部即ちものゝふといふに至り。矢並は矢ならびにて胡籙の矢の並びをることなり。つくるふは作るの延音、小手は腕を着くる武具なり。とばしるのとは接頭語にて意なし。但しこの

胡籙

大前

一音の爲は霰のつよくふり來る様よく表きて、力あり。下野國那須野の原、篠など生ひ茂りよきは、しかいふ。殊更にこゝをしも取り出でたるは、源頼朝の獵しよることもあまはなり。一首の意は那須の篠原に集まる數萬の貔貅、今は小手さし延べて籙の矢並つくるはんとするに、霰俄に墜下し來り、その上よとばしりて散亂するよとなり。景致壯大を極め、氣勢限なく強し。優柔婦女の口吻を擬する新古今時代歌人のかけても及ばざる名什といふべし。

(武島羽衣)

二四 明治の一瞥 (二) 經過一斑

維新以來、社會情態の變遷の速なるは驚くに堪へたれども、

會心

この變遷にも順序あり、波瀾あり、一進一退四十餘年を経て、遂に今日の形勢を見るに至れるなり。

維新の際、政府は厲聲疾呼して社會の改革に力め、諸藩も新を競うて他に後れざらんとす、極端なるは歴史の破壊を以て會心の事とすれば、熊本、名古屋の名城も泥土に委せられんとし、興福寺の五重塔も焼却せられんとして纔に止みぬといふ。輕卒燥急、一時は婦人にして散髪となれるものさへあり。されど舊に安んじて變を喜ばざるは人情の常、一般の社會はなほ新制に慣れずして前代を慕ひ、不平の徒は、暗殺に暴動に種々の手段を以て當局者の施設に反抗したり。

參與横井平四郎經綸の才あり、夙く外國交通を盛んにし、外

隨一

荆軻も聶政も共に支那戰國時代の刺客

教の弘布を許さんとする意見を持したれば、頑固の士數輩視て以て國賊とし、これを刺殺せり。兵部大輔大村益次郎は兵略に通じて維新の戰功隨一の人、諸藩の武士の跋扈を慨し、兵權を朝廷に收めんとして、また賊徒に傷つけられて死せり。かくの如く事理を辨へず、荆軻聶政を以て自ら任ずる徒、往々にしてこれあり。多數を頼んで亂民の蜂起せるものには、兵制の改革に激したるあり、藩主の滯京を以て領民を捨つるとなせるあり、伊勢神宮を東京に遷さるべしとの浮説を信じたるあり、小學校廢止、太陰曆復舊を叫べるもあり、税法に不満なるもあり。米澤藩士雲井龍雄は在朝の顯官を除きて幕府の世に復さんとし、謀露れて誅せられぬ。徵兵令

一揆
跡を收む

武斷派

の布かるゝや、その告諭に血税の語あるを見て、政府は人民の血を取るなりと稱して騷擾せる無智の民もありき。されど新政の整頓と共に、社會も平穩に向ひ、わけて西南の役に政府の動かすべからざるを知りてよりは、一揆暴動漸くその跡を收むるに至れり。
西南の役は征韓論に兆せり。明治六年征韓論に議合はずして野に下れる名士のうち、西郷隆盛等は武力によつて政府に反對し、板垣退助等は言論を以て素志を貫徹せんとす。その結果、言論を以てしたるは政治運動となり、武力によれるは西南の役を起ししなり。憐むべし、維新の元勳空しく城山の露と消えて武斷派は亡び、これより政治家の活動の時機

印綬を解く

民權の搖籃

夢想

縲綖

は來れり。抑、退助の印綬を解いて郷里高知に歸るや、少年子弟を集めて立志社を起し、或は法學の研究を奨勵し、或は俚歌を作りて人心を鼓舞し、頻に自主自由の説を唱道せり。されば土佐は民權の搖籃として夙く世人に注目せられしが、十年以後に至りて、この主張は翕然として天下の耳目を聳動し、都鄙到る處政治の論評を聞かざるはなし。政黨樹立し、有志奔走し、縱論橫議、ルソ一の民約論等を耽讀して佛國の革命を夢想するも少からず、矯激の士の時に國事犯を以て縲綖の厄に遭ふもあり。自由は時代の流行語にして、自由亭、自由糖など、何くれと縁もなきものにまでこの二字を附けたること多し。退助の岐阜に遊説するや、刺客あり、短刀を揮

自由は死せず
(擬人法)

無頼

喝采を博す

長足の進歩

つてこれを刺す、退助傷を負うて屈せず、叫んで曰く、板垣死すとも自由は死せずと。演説會といひ、懇親會といふも、蓋し政治運動の爲に起り、一時壯士といひて無頼の徒の横行せるも、またこれが爲なり。新聞紙は政治家が意見發表の機關となりて、その數著しく増加すれば、文學もまた時勢の影響を受けざるを得ず、所謂政治小説はこゝに流行し、經國美談、佳人の奇遇、雪中梅等の淺薄粗笨なる作品、世人の喝采を博したり。かくの如きもの數年にして、社會の趨向また一變せんとす。維新の變は前代の社會を破壊せり。政治は新に料理せられ、物質的文明も一時に長足の進歩をみせりと雖も、精神的事

支離滅裂

曲亭馬琴、式亭三馬

功利の思想

警鐘

業の改造は容易からず、文藝は元來趣味の上に立てるに、趣味は大勢の變に會うて支離滅裂せり。硝子罎は青磁、樂焼に代り、鐵葉細工は金蒔繪を凌ぎ、古書珍籍露店に曝されて砂塵に塗る、黯黯たり、混沌たり。馬琴、三馬の遺風を襲ぐもの萎靡して振はず、美術家も生活の難に堪へずして業を轉ずるもの相繼げり。功利の思想一時に瀰漫し、文藝は具さに逆境の苦を嘗めたるが、物極つて變ず、暗黒のうち曙光は閃き、二十年前後に至りて旭日東に昇りぬ。明治十八年、坪内逍遙小説神髓を著して、小説の本義を論じ、併せて當世書生氣質を世に示せり。實にこれ文學革新の警鐘にして、同じ頃また新作家の硯友社を結べるあり。政治に

覺醒

のみ奔走せし世人も漸く顧みて文藝を思ふ。二十年頃には雑誌の新刊一時に盛んに、博文館は日本大家論集を以て顯れ、金港堂の都の花も行はる。徳富蘇峰は新日本之青年を著して青年學生を覺醒し、尾崎紅葉、幸田露伴は文壇の二星と仰がる。衰頽を極めし美術界も同時に銳氣を回復して、二十一年東京美術學校は設立せられぬ。奎運隆々として、百花繚亂、新時代の春は始めて闌なり。

二十七八年の戰役には、國威外に伸張せしと共に、文藝も内に一新せり。現時著名なる文學、美術の作家が名聲を博せるもこの時にして、高山樗牛が評論界の驍將となりしも亦この時なり。如上の經過を思ふに、氣運は凡そ十年毎に一變せ

るなり。その後更に十年、三十七年に至つて露西亞と戰端を開き、無數の人命と財帑とを損せしが、東洋新興の強國は毫も挫折せず、後進氣銳の士、彬々として輦出^車し、老大家を凌いで帝國の文化に貢獻せんとす。洋々たる前途、希望の光は輝けり。

二五 上島鬼貫

上島鬼貫は攝津伊丹の人にして、元祿、享保の間、俳諧を以て近畿に鳴り、「行水の捨所なし、蟲の聲」の句の如き、今日もなほ人口に膾炙す。その句概ね淡泊にして飾らず、作らず、意のゆくに任せて語に雅俗を擇ばず、飄逸風の如く澹蕩水の如き

享保元年は二三
七六年、徳川吉
宗の時

雅俗

一方の雄

中に、不可言の雋味あり。伊丹風の一派を樹てて一方の雄たりしも、故なきにあらず。

口ずさむ

貞門は松永貞徳の門下
高足

嘗てみづから修業の經歷を語りて曰く、伊丹は昔より連俳のすき人多かりければ、おのづから耳に心にうつりて、八歳になりける年「おい〜」といへど螢が飛んでゆく」と口ずさみしを始として、十三歳の比貞門の高足松江重頼に師弟のちなみを結びて、いよ〜この道に深く辿り入り、十六歳の比より、檀林の開祖梅翁宗因の風流に心移りて、さまざま異體異形の句を吐き散して、そらるに自ら得たりとせしが、一朝深省して思へらく、古風、檀林の俳諧は共に詞を巧にし姿を飾るのみにて、心淺し。つらく〜古來の名歌といふを察す

檀林

古風は貞徳の風

詞藻

貞享二年は二三
四五年

るに詞に巧もなく、姿に色品をも飾らず、さら〜と詠み流して、まかもその心深し。古風檀林の詞藻作意に拘泥するは、いまだ道の至れるものといふべからず。猶深き奥もやあるらんと、思ひ煩ひて自ら安んぜず、沈潜數年、貞享二年二十五歳の春、まことの外に俳諧なしと悟りて、詞藻作意にのみ汲汲たる弊を蟬脱し得たりといへり。芭蕉が杜詩の風骨を探り、山家集の寂寥を辿りて、遂に貞門の陳腐を棄て、檀林の浮華を去りて、古池の一句に新旗幟を翻したると、東西期せずして符契を合するが如く、その時機精神を等しうするも奇なりといふべし。
又いへらく、俳諧に遊ぶ人、あらましにも言ひこなせば、はや

蟬脱

杜詩は盛唐の詩
人杜甫の詩
山家集は西行の
歌集
古池や蛙とびこ
む水の音

符契を合す

シ4
又5
音

なりなん
ありぬべし

得たり顔して茲に止るものあるは、深く慨すべきなり。或時は句も成り易きやうに覺え、又或時はひたすら成り難くもなりなんこと、幾かはりもありぬべし。深く入りなん人は、その程々に功つのりて、猶むつかしきことを覺らん。修行の道に限あらざれば、至りて止る奥もあらじ。唯臨終の夕までの修行と知るべし。例へば宗祇法師は連歌の達人にて、之に竝ぶものなしといへど、祇公ひとりの上には、今五年生き給はば五年の功、十年ながらへ給はば十年の功もありぬべきこと、にこそといへる、獨り俳諧の上のみならず、いつれの道にもわたりて深切なる教訓なり。

二六 俳句

手をついて歌申し上ぐる蛙かな。

(山崎宗鑑)

元朝や、神代のこともおもはるゝ。

(荒木田守武)

白露や、無分別なるおきどころ。

(西山宗因)

五月雨をあつめてはやし、最上川。

(松尾芭蕉)

名月や、池をめぐりて夜もすがら。

(同)

聲かれて、猿の齒しろし、峰の月。

(榎本其角)

黄菊白菊、その外の名はなくもがな。

(服部嵐雪)

ほと、ぎす、平安城をすぢかひに。

(與謝蕪村)

蕭條として石に日の入る枯野かな。

(同)

なくもがな

祇園會や、錦のうへに京の月。

(正岡子規)

二七 百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。それも
鳴く音の愛なければ、籠かごに苦しむ身ならぬこそ、猶めでたけ
れ。さてこそ莊周シが夢もこの物には託たくし々免。

蜂のほかの蟲を取りてわが子となす、老のゆくへをかゝら
んとにもあらず、なにをゆづらんとてかくはほねをるにや。
我に似よくとは、いかにおのが身を思ひあがれるにかあ
らん。蜜をこぼして世の爲とするはよし。唯人目稀なる薬師
堂に大きなる巢作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それ

思ひあがれる

悪まれじを

花に啼く鶯、水
にすむ蛙の聲を
きけば、蛙の
しげいけるもの
ざりける
(古今集)

も針なくば、人には悪まれじ哉。

蛙は、古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこ
そ幸なれ。朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛
んで翁の目さましたれば、このものの事更にも、謗やりがたし。』
蟬は五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに
啼きさかる比は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙
ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこ
そ、大きなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えずと、このも
のの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は、たくふべきものなく、景物の最上なるべし。水に飛びか
ひ、草にすたく。五月の闇は唯このものの爲にやとまでぞ覺

すたく
爲にやとまで
ぞ覺ゆる

やがて死ぬけし
きは見えず蟬の
聲
芭蕉

晋の車胤の故事
孫康

ゆる。然るに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり、俳諧にはそのまねすべからず。日ぐらしは、多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく比ならん。つくくぼふしといふ蟬は筑紫戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからむ。

いへりけり
蜀魂

蜘蛛は巧に網を結んで、ひそまつて物を害せんとす、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代、朝敵の始として、頼光をさへおびやかしたる、いと恐し。さはいへ、廢宅のあれたる軒に

ちりぼふ

蟬の羽などかけすてたるは、聊かあはれそふ折もあらんか。かれはかひなくしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらん。

槐安の都云々は
淳于棼の傳説を
引けるなり

蟻は、明暮にいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず、いつか槐安の都をのがれて、その身の安きことを得ん。さりともたよりあじきに穴を営みて、千丈の堤を崩すべからず。

促織、鈴蟲、くつわ蟲はその音の似たるを以て名に呼べるに、松蟲にその木にもよらで、いかでかく名をつけたるならん。毛おひ、むくつけき蟲にも同じ名あり、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後世を願ひ、一人

歎くらんを

さすが

晋の竹林の七賢

は殺生を事とす、これ松蟲の類なるべし。
きりくすのつゝりさせとは人のために夜寒を教へ、藻に
棲む蟲はわれからと、唯身の上を歎くらんを、蓑蟲のちよよ
と呼ぶは、父のみ戀ひて、なかは母を慕はざるらん。
蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の比、端居珍しき夕、始め
て仄チカに聞きたらん、又は長月の比、力なく残りたるは、淋しき
方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、か
つは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊に烈しきを、かの七賢
の夜咄チヤウには、いかに團扇の隙なかりけん。
(横井也右)

二八 秋の月

九九

況や……
於てをや

秋としいへば、淋しきもの、わびしきもの、悲しきものと、古來
定まれるものの如き感あり。然れども予輩の見を以てする
に、秋は決して悲哀蕭條に限られたる時期にあらざるなり。
試に思へ、金風一たび吹き至れば、炎熱頓にその威を減じ、心
身共に爽快を覚え、自他すべて生氣を復し來るにあらざるや。
蟲聲飛雁、悲哀ならざるにあらざる、枯木寒雨、蕭條ならざるに
あらざれど、菽米の穰々として豊熟するは、この時なるにあ
らずや。柿栗の實の累々として梢を飾るは、亦この時にあら
ずや。秋は實に禾穀豊熟の季にして又その收穫の節なり。即
ち農家匆忙の期にして、決して沈痛悲傷の季と定むべきに
あらず。況んや風物に於ても、秋晴の清爽比するに物なくし

て、天空海闊の氣宇を養ふに足り、嚴霜に誇れる錦楓の春花の艶麗にも勝り、皎々たる秋月の清光四海に遍きものあるに於てをや。

若し……
之に對せんか
(設疑法)

抑、秋月の光輝は四季の中に於て最も清朗なるもの。若し羈旅の身として、雲山萬里、故郷を隔てて之に對せんか、

安倍仲磨の詠

あまの原ふりさけ見れば、春日なる

かも

三笠の山に出でし月かも。

轅軻

の感慨、轉た深きものあらん。又事皆志と違ひ、轅軻不遇なる境にありて之を眺めんか、

三條天皇の御製

心よをあらでうき世ふながらへば、

大むしあるべき夜半の月かを。

の如く、痛恨の情禁ずる能はざるものあらん。

之に反して、百事意の如く、權貴に傲れる者は己が得意満々の情を天上の明光に比して、

藤原道長の詠

大の世をばどが世とぞ思ふ、望月の

かたたることもなしと思へば。

松平定信の詠

の感あるべく、又足ることを知つて悶ゆることなき人には、出づるかと月まつほかに、秋とてを

思ふことなき夕ぐれの空。

の感あるべし。されば、同一の月を觀て、或はこれを悲しみ、或はこれを歡べども、月にその素因あるにはあらず。

井上文雄の詠

悲しとも面白しとも見る人此

主観的

心こころをむるぬ月の影かき。

悲喜哀樂全く吾人の境遇と主観的心情との如何に在りと謂ふべし。
(自然之妙趣)

二九 述懐

擬古文

生おけおらんおにて
だに
草木鳥獸の同
じ列
何すとしも

昨日の今日の昔よては、擬古文あなくのこ過ぎ行く世の中茂つくづくと思へば、手何をまわが世も幾程ぞや。指を折りて數ふれば、はや三十にも餘りまけり。命長くて七十、八十生たらんにてよ、早くなればまぎぬるよと思へば、まご世ごもれるやうなる身もゆく先ほどなき心地の志て、心細くが覺ゆる。かくのこはあなく、心なき草木鳥獸の同じ列りま、何すとしも

第九

いたり
何事をしいで
てかは……
止めまし

はふらかす
何業にまれ
ゆるづく
あいなだのみ

なく明し暮しつゝ、生たるかぎりの世茂つくして、徒ら小苔の下に朽ち果てなんは、口惜しくいふかひなるべきことと思ふにも、萬ふいゝを少く、拙き身にしあれば、何事を志いでてかは世の人ふも數まへられ、なあらん後の世に朽ちせぬ名をよと止めましと、いと人ふ似ぬおろおろはへ取りそへてぞ、悲しく心うありける。
けりとは、身をえうなきものにはふらあし果つべきにもあらず。かくのこ拙くおろおなる心なあら、何業にまれ怠なくわざと心ま入れて勤めたらんよと、遂よそ一つゆるづらて、なのめに志いづるふしをなどおのあらんと、いひあだのみにかゝりてなん。
(本居宣長)

